

今号では、慶應義塾大学病院ならびに鳥取医療センターにおいて、パーキンソン病(PD)診療に携わっているメディカルスタッフの方々に、それぞれの施設における取り組みや患者さん支援の視点についてお話しいただきました。

鳥取医療センター パーキンソン病センターにおける取り組み



看護師
長谷川 愛理氏
鳥取医療センター
パーキンソン病センター

●「院内認定PDナース」の育成と「PD看護外来」の設置

当院では、2016年の「PD短期集中リハビリテーション入院」の導入を機に、PD患者さんに対しより専門的な支援を行う看護師の必要性が注目されました。当時は、看護師が自主的に日本パーキンソン病・運動障害疾患学会(MDSJ)主催のPDナース研修会(現在はPDナース・メディカルスタッフ研修会)や難病に関する研修会などを受講していましたが、今後の医療情勢などを踏まえ、2018年より「院内認定PDナース」の育成が始まりました。その後2020年に「PDセンター」が開設され、「PD相談窓口」と「PD看護外来」が設置されました。私は、院内認定PDナースの1期生で、現在は6名のPDナースが当センターに勤務しています。

院内認定PDナースの教育期間は約6ヵ月で、講義17.5時間(14項目)、見学実習6時間(6項目)、退院前・後訪問(各1件)、筆記テスト(80点以上)、実践報告書による症例発表、課題レポートの提出といった教育プログラムを完了した後に認定を受けることができます。講義内容はPD概論や看護をはじめ、薬物治療、リハビリテーション、栄養管理、難病支援、地域連携など多岐にわたり、院内の多職種で教育に当たっています。

●院内認定PDナース、PD療養指導士を目指したきっかけ

PD短期集中リハビリテーション入院の導入当初、転倒を繰り返す患者さんへの対応としてセンサーマットを使用して経過を観察していたのですが、ある患者さんが自分では動かなくなってしまいました。笑顔もなくなり、臥床時間が長くなってしまったため、カンファレンスを開いてチームで話し合い、センサーマットを外して、手すりの代わりになるような重い机や椅子を置き床に視覚的キューを設置しました。その結果、自発的に動くようになり、笑顔も増え、転倒もなくなりました。このようにチームで話し合っただけで実践することで患者さんに還元できることを経験したことが、PDナースを目指すきっかけとなりました。その後、さらにPDに関

する知識を増やしたいと考え、MDSJのPD療養指導士の資格も取得しました。これらの資格を取得したことで、チーム医療においてリーダーシップを発揮していきたいという気持ちが強くなりました。

●PD患者さんやご家族との関わり

PD看護外来では患者さんに、「まず1回は自分でやってください。できなければ家族に手伝ってもらいましょう。」などと伝えていきます。また、PDは動かなくなると動けなくなってしまうため、「1日5分でもいいので毎日運動しましょう。」「あいさつも含めて日常生活はすべてリハビリにつながっているんですよ。」などと運動の継続を促しています。趣味を持つことや、家族に感謝の気持ちを伝えることの大切さについてもお話ししています。

ご家族との関わりも大切にしており、「患者さんのことで困ったことがあったら、ひとりで抱え込まずに相談してくださいね。」「ご自身の体調管理も大切です。」などと伝えていきます。患者さんの前では言えないこともあるため、診察が終わった後に別室でご家族のお話を聞くこともあります。そうすることで、ご家族が抱えている問題や悩みなどを聞き出すことができ、その内容が治療のことであれば医師、経済的なことであればメディカルソーシャルワーカーなど、多職種と連携して解決につなげていきたいと考えています。

●今後の課題

PD患者さんが自宅や地域で生活していくためには、介護者による支援が重要であるにもかかわらず、ご家族にはあまり目が向けられていないと感じており、家族に対する支援体制を強化することが今後の課題だと考えています。また、リハビリテーションにより機能が向上しても、病棟内で継続できていないようなので、病棟で過ごす時間のなかに訓練の時間を組み込んでいく必要があると考えています。

●PD診療に携わっている方、これから携わる方へのメッセージ

まず、目の前の患者さんが安全に入院生活、ご自宅での生活を送ることができるように、患者さんやご家族の気持ちに寄り添いながら支援していくことが大切だと思います。また、多職種が連携して治療を実践していくなかで、PD看護の楽しさを私から発信することで、同じ志を持つ看護師が増えることを期待しています。